

6 観音信仰にみる歴史的風致

① はじめに

湖北地方には仏教美術が多く、昭和60年(1985)ごろから高月地域を「観音の里」と呼ぶなど、木之本地域から高月地域にかけて高い密度で観音像が分布している。その背景の一つとして、この地域がかつて木之本地域の東にそびえる己高山(標高923m)を中心に繁栄した仏教圏域に属し、その影響を受けていたことがあげられる。

応永14年(1407)に編纂された『己高山縁起』によると、己高山は近江国の鬼門に位置し、古来より霊山として修行場であった。行基が勝地としてこの峰を選び、伽藍を草創して仏像を刻み、のちに泰澄が聖跡としてこの山を崇め、峰に入って修行場とした。その後、最澄が白山白翁と名乗る老人の勧めによって再興し、自らも十一面観音像を刻んだとされている。

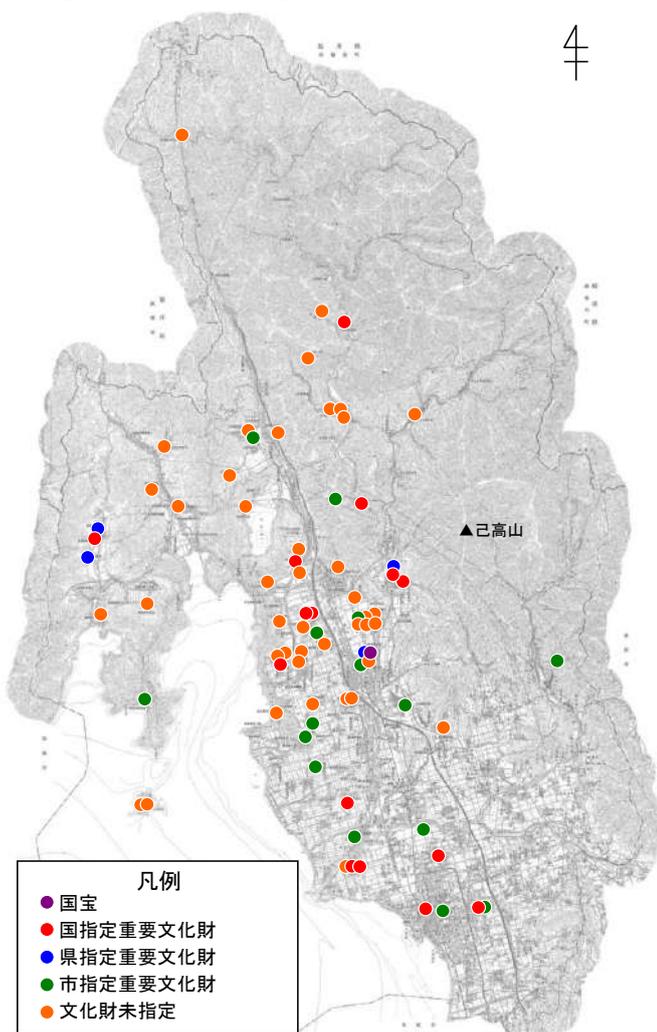
また、嘉吉元年(1441)成立の『興福寺官務牒疏』では、己高山五ヶ寺として、法華寺・石道寺・観音寺・高尾寺・安楽寺、また観音寺の別院として飯福寺・鶏足寺・円満寺・石道寺・安楽寺の六ヶ寺を記載している。己高山は近江の鬼門として古来より霊山として崇められ、さらに平安時代には比叡山の天台勢力の影響を強く受けるとともに、湖北地方は古代から交通の要衝で

あったことから、これら諸宗派が混ざり合って特徴ある仏教文化が形成された。また天台宗と山岳信仰の習合により、神仏習合の形態をとった寺院も見られるようになった。

平安時代以降、湖北に存在した寺々は、天台宗の傘下として己高山を中心に栄えたが、室町時代には天台宗が弱体化し、その多くは無住・廃寺となっていた。しかし、そこに残された観音像は宗派の枠を超えて村の守り本尊として人々に守られてきた。

高月地域、木之本地域、余呉地域には、国・県の文化財に指定された木造彫刻が35件あり、特に観音像が多い。未指定物件を含めると50の社寺に60余体の観音像を数え、その内訳は十一面観音27体、聖観音21体、

図 市内における観音像が安置されている箇所



第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

千手観音6体、馬頭観音2体、そのほかの観音4体と様々である。

なかでもこの地を代表する観音像が、高月町渡岸寺にある向源寺の国宝・木造十一面観音立像（観音堂安置）である。寺伝によれば、天平8年（736）に、奈良の都で疱瘡が流行して死者が相次ぎ、それを憂えた聖武天皇の命を受けた泰澄が、十一面観音像を刻み、一字を建て祈願したのが創建とされる。姉川の合戦の際にこの一帯は戦場と化し、堂舎はことごとく焼失してしまったが、ときの住職と村人によって火の中から観音像を運び出し、地中深くに埋めて、難を逃れたといわれている。



【国宝・十一面観音立像が安置されている高月町渡岸寺の観音堂】

そのほかにも、高月町宇根の冷水寺に安置されている旧本尊は、戦火で焼けただけた姿でありながら、村人が捨てるにしのびなく鞆仏に入れて現在まで守り続けられている。高月町唐川の観音堂に安置されている木造千手観音立像と木造菩薩立像は川に沈められて戦禍を免れ、また、木之本町黒田の西黒田安念寺に安置されている観音像は、田に埋められて難を逃れ、のちに掘り起こしたときの姿が芋のようであったことから「いも観音」と呼ばれ、人々から親しまれている。さらに高月町洞戸の洞戸地藏堂では、村人が燃えさかるお堂から仏様を助け、自らの腹を割き、抱きかかえて守ったといわれている。このように湖北の地は、姉川の合戦や小谷城の合戦、賤ヶ岳の合戦など幾度となく兵乱に巻き込まれたが、そのたびに篤い信仰心を持った地域の人々が身を挺して観音像を守ってきた歴史がある。

このように観音様が人々に守られてきたのは、観音様が恐れや災いのない世界を人々に施してくれるという「妙法蓮華経」の「観世音菩薩普門品」第二十五（観音経）の教えによるものである。観音様の姿は三十三応現身、33の姿に変身して、病気から天変地異にいたるまで、人間に降りかかってくる災厄のすべてを救うとされている。このように現世利益の、その慈悲ゆえ、人々に親しみをもって信仰されてきた。

また、この地域には国宝や重要文化財に指定されている観音像が多いが、これらの観音像が所蔵されているのは七堂伽藍のそびえる大寺ではなく、木々に埋もれたお堂や集落のなかの小さな祠が多く、今なお地域の人々によって手厚く守られている。



【胎内仏】（冷水寺蔵）



【木造菩薩形立像（いも観音）】（安念寺蔵）

② 建造物

1) 日吉神社観音堂（赤後寺）

高月町^{からかわ}唐川^{ゆるぎやま}の湧出山の南麓に位置する日吉神社は、貞観15年（873）の創祀と伝えられる。もとは、久留弥多神社と称し、延喜式神名帳の久留弥多神社に比定される。当地が延暦寺の寺領となり、坂本（大津市）の日吉大社から分社勧請し、後に主客転倒したと考えられている。同社境内の観音堂は、もとは唐喜山^{しよくづと}赤後寺と称し、千手観音立像を刻んだ行基が開き、のちに最澄が菩薩立像を納めた。元暦年間（1184～1185）に堂宇が焼失した際、観音像を赤川へ沈め、難を逃れたと伝えられ、その後再興するも再び兵火に遭った。自治会所有赤後寺文書によると、現在の観音堂は明治5年（1872）に再建された。



日吉神社観音堂（赤後寺）
入母屋造、棧瓦葺
明治5年（1872）建築（文書）

観音堂は桁行3間、梁間3間の主体部の四周に1間幅の縁を廻し、正面に1間の向拝を設けている。屋根は入母屋造、棧瓦葺であり、主体部は正面1間通りを外陣、後2間通りを内陣とし、内部には重要文化財の木造千手観音立像と木造菩薩立像が安置されている。外陣は正側面の三方を建具で仕切られているが、当初は吹き放しであったとみられる。湖北地方に多い入母屋造の方三間堂のなかでも比較的規模の大きな仏堂で、側廻りでは頭貫を虹梁型とし、柱頂に木鼻付きの出組を組み、支輪を入れて柱上部を装飾している。

観音堂は、湧出山^{ゆるぎやま}の中腹に建ち、かつては足利尊氏から荘園を寄与され、隆盛を極めたという。厄を転じて利をほどこす「転利（コロリ）観音」として親しまれ、3回お参りすれば長患いせず極楽往生できるともいわれる。毎年、7月10日の「千日会」（この日にお参りすれば千日分の功德があるという法要）には、全国から訪れる老若男女で賑わう。

2) 西野薬師観音堂

高月町西野の集落の中央に位置する西野薬師観音堂は、もとは泉明寺と称し、集落の北側にある西野山^{せんみょうじ}に建っていた。寺伝によると、千手観音立像を刻んだ行基が開き、後に最澄が菩薩立像を納めた。永正15年（1518）の兵火により焼失した堂宇から、辛うじて仏像は救出され、現在地に仮堂が建てられ、安置されていた。現在の観音堂は、堂内に掲げられている古写真から大正15年（1926）に建築されたことがわかる。



西野薬師観音堂
入母屋造、棧瓦葺
大正15年（1926）建築（文書）

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

観音堂は桁行3間、梁間3間の主体部の四周に半間幅の縁を廻し、正面に1間の向拝を設けている。屋根は入母屋造、棧瓦葺であり、堂内には、ふっくらとして穏やかな表情で肉付き豊かな十一面観音立像とふくよかで目鼻立ちの整った相好の薬師如来立像が安置されている。十一面観音像、薬師如来像ともに重要文化財で、平安時代の作と伝わり、「中風封じの仏様」としても知られている。

3) 石道寺

木之本町石道にある石道寺は、己高山関連寺院の一つで、もとは現在地よりさらに1kmほど東の山中にあり、己高山五カ寺の一つとして隆盛を極めた。しかし、明治27年(1894)に仁王門を焼失し、明治29年(1896)に起こった山崩れで荒廃したため、大正3年(1914)本堂を現在地に移し、己高山五カ寺の一つであった高尾寺の仏像も合祀し、大正4年(1915)4月に盛大な遷仏式を行った記録が自治会所有文書に残っている。

観音堂は桁行3間、梁間3間の主体部の四周に半間幅の縁を廻し、正面に1間の向拝を設けている。屋根は入母屋造、鋼板葺であり、内部には重要文化財の木造十一面観音立像とその両脇に持国天立像と多聞天立像などが安置されている。

平安末期の作と伝わる本尊の十一面観音立像は、檜の一木造で、唇には紅をひとすじ残しており、当時は極彩色であったことが窺われる。ゆるやかな姿態に流れるような衣をまとい、柔和で穏やかな印象を与え、「子授けの観音様」としても知られている。



石道寺
入母屋造、鋼板葺
大正3年(1914)建築(文書)

③ 活動

観音堂の世話方

高月町唐川の湧出山の南麓に位置する日吉神社の境内にある観音堂は、もとは赤後寺と称し、千手観音立像を刻んだ行基が開き、後に最澄が菩薩立像を納めた。元暦年間（1184～1185）に堂宇が焼失した際、観音像を赤川へ沈め、難を逃れたと伝えられる。その後再興するも再び兵火に遭っており、現在の観音堂は明治5年（1872）に再建したとされる。

このように日吉神社と観音堂が同じ境内にあり、その周囲には鎮守の森が広がっているような、かつての神仏習合や山岳信仰の名残を残した寺社が現在も木之本・高月地域に多く見られる。

昭和17年（1942）の唐川自治会の『決議録』によれば、「堂守 雨森定右エ門」（堂守とは、観音堂のお世話をする人）とあり、このころまでには、地域の人々による観音堂の管理体制が確立していたことがわかる。現在でも、日吉神社と観音堂は、地域の人々によって守られている。

観音堂の管理は、自治会で選ばれた6人の「世話方」を中心に行われており、任期は2年間、毎年3人が交代し、毎日交代で拝観者の対応などを行っている。

この「世話方」を中心として自治会全員が協力して世話を行っており、自治会を11組に分け、月ごとに各組が担当する。組の人たちが持ち回りで、毎朝欠かさず本堂内の脇に置かれたガラス棚のなかに「おぶく（御仏供）さん」と呼ばれるご飯などを供え、夕方下げる。また月2回、組で日吉神社境内の掃除も行っている。

また、西野薬師観音堂では、昭和4年（1929）に奉賛会を組織した設立文書が残っており、「世話方」が薬師観音堂の管理を行っている。「世話方」は9人で任期



【日吉神社】



【日吉神社観音堂】



【木造千手観音立像(左)と木造菩薩立像(右)】(日吉神社蔵)



【おぶくさんを備える様子】

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

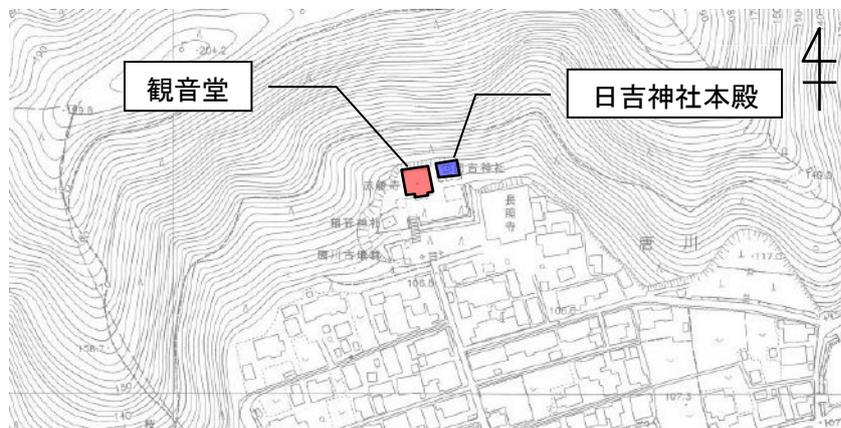
は3年間、毎年3人が交代し、5日交代で拝観者の対応などを行っている。また「堂守さん」と呼ばれる役員2人が、毎月8日の「八日薬師」、正月・盆のお供えの準備、境内や堂内の護持清掃などをおこなっている。

同様に石道寺では、自治会内の30軒から交替で1日2人ずつが「当番」として、石道寺内にある案内所に詰めて、日常管理と拝観者の対応などを行っている。

このように日吉神社をはじめとして、今なお多くの観音像が現存しているのは、地域の人々による「守る努力」なくしては有り得ないことである。



【境内を清掃する様子】

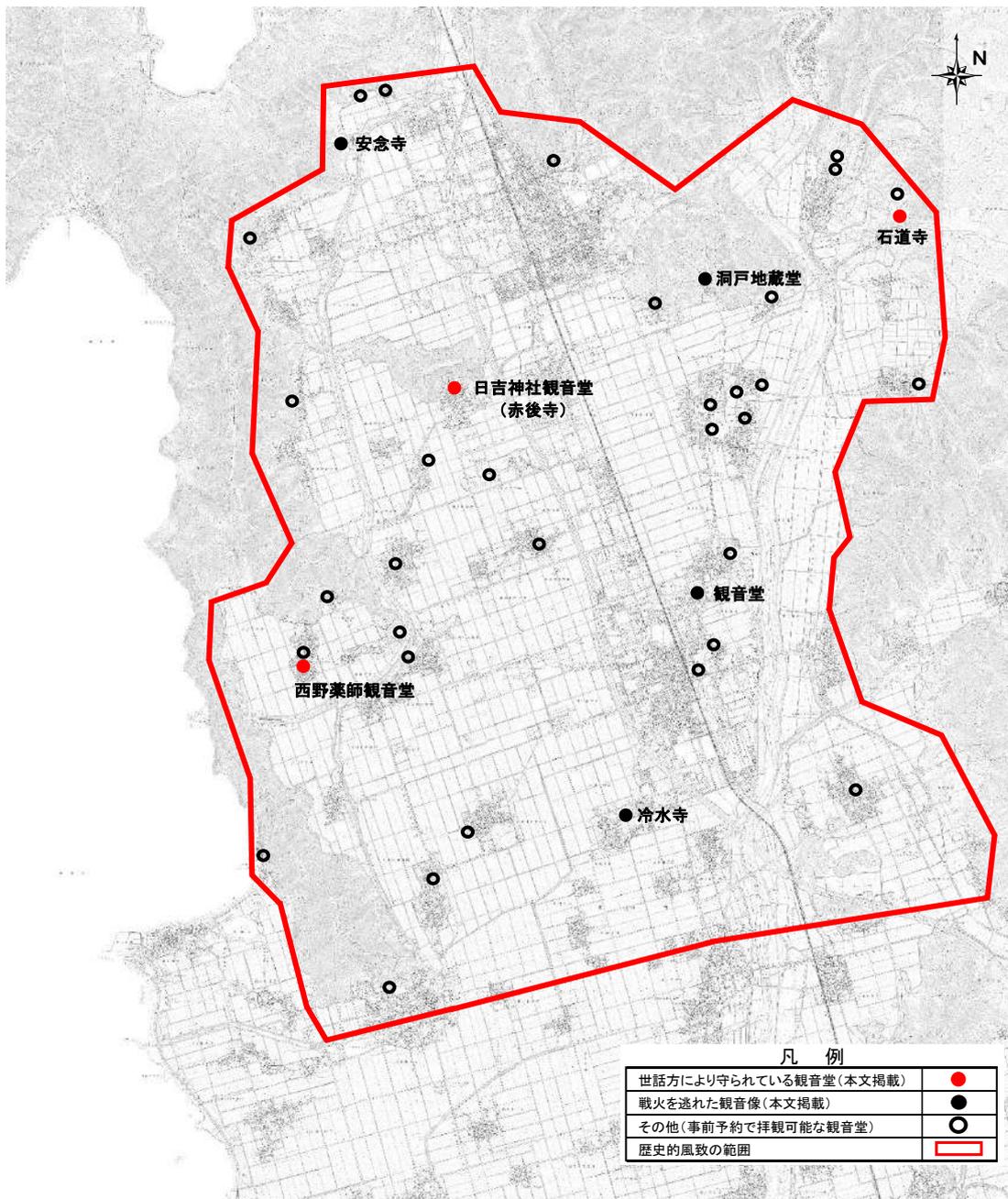


【観音堂（左）と日吉神社本殿（右）】

まとめ

三方を緑豊かな山々に囲まれ、風光明媚な田園風景が広がるこの地域では、観音様の多くが無住の小堂で地域の人々によって大切に守られている。しかし、地域の人々にとっては、観音様を守らせていただいているという、そのありがたい「ご縁」に感謝して暮らしている。このように観音様を献身的に守り継いできた人々の歴史こそが、真にこの地を「観音の里」たらしめており、木々に埋もれたお堂や集落のなかの小さな祠が地域の人々によって手厚く守られている歴史的風致が形成されている。

図 観音信仰にみる歴史的風致の範囲



7 奥琵琶湖にみる歴史的風致

① はじめに

琵琶湖周辺の人々は、古くから琵琶湖で漁を営み、またその水運を利用した湖上交通や湖上輸送を盛んに行ってきた。縄文時代から平安時代にかけての土器や石器が見つかる葛籠尾崎湖底遺跡をはじめ、多くの湖底遺跡が確認されていることから、人々が縄文時代には既に琵琶湖とともに暮らしていたことがわかる。なかでも奥琵琶湖と呼ばれる琵琶湖の最北端にあたる一帯は、周りを険しい山々に囲まれ、湖岸線が複雑に入り組んだ地域であり、港を中心としたいくつかの集落が点在している。これらの集落では、漁を生活の糧としており、西浅井町大浦や西浅井町塩津浜は水運を生かした湊町として発展したため、かつては海津（高島市）とともに湖北三湊と呼ばれていた。

また、明治26年（1893）に大日本帝國陸地測量部が作成した地形図と長浜市が平成21年（2009）に作成した地形図を比較すると、湖岸部分において大きな変化がなく、現在に至るまで周辺の環境が保たれてきたことがわかる。



【上空からみた奥琵琶湖】

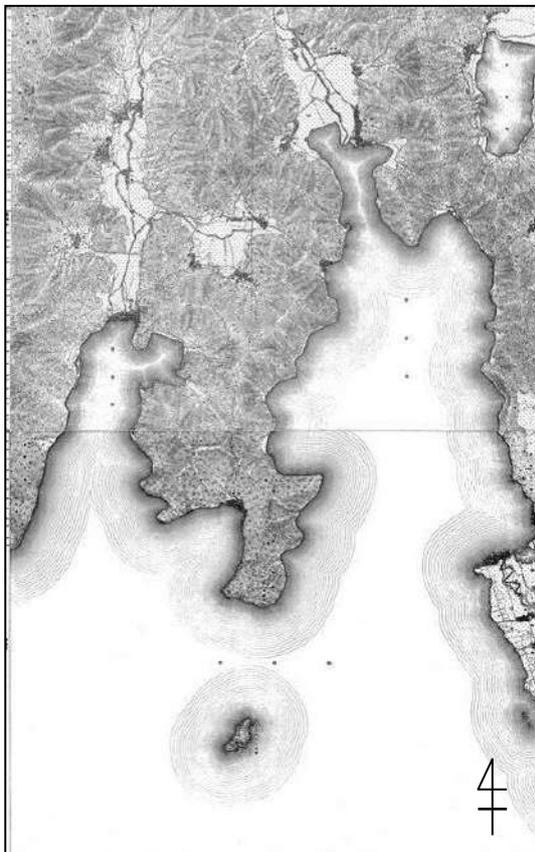


図 大日本帝國陸地測量部作成2万分の1地形図（明治26年）（竹生嶋と賤ヶ嶽の合成）



図 長浜市作成5万分の1地形図（平成21年）（部分）

中世自治の村 菅浦

菅浦集落は、琵琶湖の北端にせり出した葛籠尾崎の先端近くの湾曲部に位置し、背後に迫る険しい山々と湖岸とのわずかな平坦地に家々を建てて暮らしてきた。昭和41年(1966)の道路の拡幅以前は、交通手段のほとんどを船に頼るという状態であったため、かつては陸の孤島と呼ばれていた。その歴史は古く、『万葉集』に「高島の阿渡の湊を 漕ぎ過ぎて 塩津菅浦今か漕ぐらむ」と詠まれ、奈良時代には湖北の港として重要な地位を占めていたと考えられている。



【菅浦集落を望む】

菅浦は、全国的にもいちやく「惣」と呼ばれる自治的村落組織を形成し、集落による自治が行われてきた。菅浦が惣村を形成する契機となったのは、北隣にある大浦庄からの独立にあった。菅浦はもともと園城寺円満院領大浦庄に属していたが、三方を山に囲まれ、耕作地の少ない菅浦にとって、大浦と菅浦の間にある日指、諸河の田畑は、貴重な土地であった。本来、この土地は大浦と菅浦の両集落が入り混じって耕作していたが、永仁3年(1295)、菅浦集落が当地の領有権を主張したことから、菅浦と大浦のあいだに大規模な紛争が起こった。150年にも及ぶ紛争は、武力衝突により多くの死者を出すまでに発展したが、法廷闘争の末、菅浦が勝訴した。この紛争の最中に作成されたといわれているのが国宝「菅浦与大浦下庄堺絵図」であり、瀬田勝哉『菅浦絵図考』(1976)によると、1340年代の作とされる。絵図の朱線は大浦と菅浦の境を示しているが、菅浦の主張を盛り込んで作成されたといわれ、日指、諸河の土地は菅浦の領有地として描かれている。



図 菅浦集落周辺の位置関係図



【菅浦与大浦下庄堺絵図 (1340年代)】
(須賀神社蔵)

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

また菅浦は、大浦との裁判を有利に進めるため、菅浦集落の全員が「供御人」となるよう幕府に働きかけを行っていた。「供御人」とは、天皇の御膳を供進する代わりに、幕府や朝廷から諸国を自由に往来し、交易活動を行うことを認められた身分で、平安時代末期には、菅浦の一部の人々が認められていた。この働きかけが実り、菅浦の全住民が供御人となることが認められ、文安4年（1447）に、大浦から正式に独立した惣村となることを認められた。

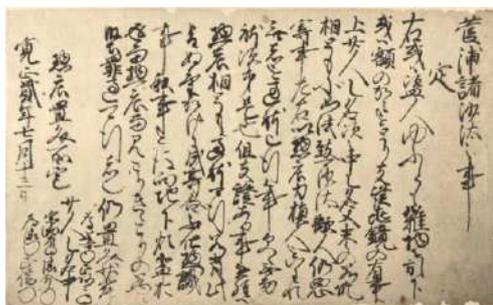
菅浦はもともと供御人だった者たちのほか、神職や農家など、様々な生業の人が含まれており、こうした職業の違いがある者全てを供御人とすることにより、菅浦は平等な構成員による惣村をつくり出し、住民全員で自治を支える体制が確立した。

惣村は、自立的組織とその機能を持っており、特徴として、領主と年貢・年課の額を一括して契約する「村請」、組織的に武装し、村同士の紛争解決力を持ち、村の掟を定め犯罪の処罰などを自らで執行する「自検断」、村の主な家が対等な関係を結ぶ「宮座」によって行なわれる「鎮守社の祭祀」、「乙名・中老・若衆」という年齢階層間の討議を通じて意思決定する「老若の組織」などが挙げられる。

かつて村内の運営において自治の中心的な機能を発揮していた中老は、「長老衆」となって現在も受け継がれている。一般的にほかの集落でも設けられる自治会長や副自治会長は、集落の生活やほかの集落との関係業務を主としているのに対して、長老衆は集落内の年中行事に関与している。

大正6年（1917）には須賀神社などから、鎌倉時代から明治元年（1868）までの菅浦集落の決まりを定めた『菅浦文書』が見つかった。1,200点を超える文書類からは中世から近世にいたるまでの菅浦の歴史が詳しく記され、日本の村落史を調べるうえで重要な文書であることから平成30年（2018）に国宝に指定された。

『菅浦文書』が見つかった須賀神社は、もとは保良神社といい、天平宝字8年（764）の創祀と伝えられる。明治42年（1909）に保良神社、小林神社、赤崎神社が合祀されて現在に至っており、祭神は保良神社が淳仁天皇、小林神社が大山咋命、赤崎神社が大山祇命であった。保良神社の祭神である淳仁天皇は、政争に巻き込まれて位を追われ、淡路島に幽閉されたとされるが、かつて菅浦に隠れていたとの伝承が残っている。須賀神社の本殿裏には淳仁天皇の御陵が残されており、また、淳仁天皇の菩提寺と伝えられている長福寺跡もある。



【菅浦惣庄置文（菅浦文書）（貞和2年）】
（須賀神社蔵）



【須賀神社】

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

早くから警察・軍事など自律的に秩序を保ってきた菅浦では、集落の領域を明確に示すものとして建てられたとされる茅葺きの「四足門」と呼ばれる門が集落の東西にある。享和元年（1801）の『古来有来通富』によると、この当時から四足門が集落によって維持・管理されていたことがわかる。また、戦国時代に菅浦の戸数を安定的に固定させる掟が定められており、それ以降、戸数・人口は近世を通じてほとんど変わらず、それぞれの家の名前も「屋号」として残っており、今に中世の姿をとどめている。



【東の四足門】



【琵琶湖から望む菅浦集落】

② 建造物

1) 西の四足門

菅浦集落の西の端に建つ門で、「西の四足門」と呼ばれているが、構造形式は四脚門ではなく薬医門である。門扉を備えつけた閉鎖機能はなく、集落の領域を示し、集落の内部空間を惣村として秩序化するという象徴的な結界としての門であり、現在でも菅浦集落に入ると一番に目に入るので、印象的である。

平成27年(2015)に保存修理を実施し、柱墨書から寛政8年(1796)に建築されたことが判明した。



西の四足門
一間一戸、薬医門、茅葺
寛政8年(1796)建築(柱墨書)

2) 東の四足門

菅浦集落の東の端に建つ門で、「東の四足門」と呼ばれているが、西の四足門と同様に構造形式は四脚門ではなく薬医門である。東の四足門にも門扉はなく、惣村の領域を示す象徴的な結界としての門であった。太田浩司『中世菅浦における村落領域構成』(1987)によると、現在ある2つの門(東西の四足門)とは別にさらに2つあったとされ、須賀神社二の鳥居付近と集落北端の山道に設けられていたと言われている。

棟札から文政11年(1828)に建築されたことが判明しており、平成27年(2015)に保存修理を実施した。



東の四足門
一間一戸、薬医門、茅葺
寛政8年(1796)建築(棟札)

3) 須賀神社本殿

須賀神社は、もとは保良神社といい、天平宝字8年(764)の創祀と伝わる。明治42年(1909)に保良神社、小林神社、赤崎神社が合祀され須賀神社となり、現在に至っている。

菅浦には淳仁天皇に関する伝説がある。淳仁天皇は藤原仲麻呂の乱により廃帝され、淡路国に流されたあと、その地で亡くなったとされている。しかし、菅浦には淳仁天



須賀神社本殿
一間社流造、柿葺
天保3年(1832)建築(棟札)

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

皇は淡路国ではなく菅浦に流されたと伝わっている。保良神社の祭神は淳仁天皇であり、神社の背後には淳仁天皇の御陵と伝えられる墳墓がある。

須賀神社本殿は、保良神社の本殿と小林神社、赤崎神社の本殿が並んで鎮座し、保良神社本殿は「東殿」、小林神社、赤崎神社本殿は「西殿」と呼ばれている。

東殿と呼ばれる保良神社本殿は一間社流造で、柿葺きとなっており、棟札から天保3年(1832)に建築されたことが判明している。明治42年(1909)の合祀の際、隣に小林神社、赤崎神社の本殿が移築され、西殿と呼ばれるようになった。

4) 菅浦家住宅主屋

菅浦家は、江戸時代に旧膳所藩の代官屋敷であったとされ、安政年間(1854~1859)の棟札があることから、このころの建築と考えられる。敷地は間口約20m、奥行約26mであり、道路に面して切妻造、屋根は棧瓦葺で、主屋は梁間5間、桁行6.5間の中2階建とそれに接続する瓦葺平屋の8畳からなる。くちの間前には式台があり、なかの間・くちの間ともに長押を回しており、格式の高い構えである。かつては表に茅葺の門を構えていた。



菅浦家住宅主屋
木造2階建、瓦葺
安政年間(1854~1859)建築(棟札)

5) 集落内の石垣

菅浦の湖岸沿いや集落内では、石垣がみられる。琵琶湖からの大波などから家屋を守るための防波堤として築かれたものと、狭隘な扇状地に位置する菅浦において、宅地や畑地を確保するために築かれたものとに分類できる。

石垣は古くから築かれており、建造年を特定することはできないが、昭和34年(1959)の伊勢湾台風の際に撮影された菅浦自治会が所有する古写真があり、湖岸沿いの石垣にあたって碎ける波の様子が撮影されており、集落を守るために築かれたことがよく分かる。このほか、昭和30~40年代の集落内の様子を撮影した「菅浦古写真集」にも当時の人々の暮らしとともに湖岸や集落内にある石垣が確認できる。



【菅浦集落内に残る石垣】



【昭和30年代の菅浦(東の舟入)】

③ 活動

1) 須賀神社春季例祭

須賀神社には、明治42年(1909)に制定された「神事会規定」があり、春の祭礼行事等がそれに則って行なわれていた。今日もその改定規定に従って1年の年中行事が執り行われている。この規定では、集落を東組、西組の2組に分けて、組が責任をもって年中行事を行うことや、氏子総代がその責任者であることを定めており、この2組が毎年交代で当番組を務める。当番組からは9人を出して「神主組」を形成することを定めており、神社における「宮座」も、この9人によって組織されている。この神主組が年番役を務め、そのうち、須賀神社の年番役を「元」、小林神社の年番役を「中」、赤崎神社の年番役を「末」として、3社に3人ずつ付き、さらに各神社の3人のうち、1月から4月までの年番を「元」、5月から8月までの年番を「中」、9月から12月までの年番を「末」として、各社1人ずつ4ヵ月間の任期を務める。このように集落の諸行事の役割は神事会規定に基づいて決められており、分担して集落の運営を行っている。

毎年4月の第1日曜日には須賀神社の春季例祭が行われる。別名「すがのまつり」とも呼ばれ、地域で親しまれる菅浦に春の訪れを告げる祭りである。春季例祭では、3社の合祀の名残として、それぞれの神を祀る3基の神輿が出される。



【神輿堂に並べられた3基の神輿】

祭礼は当番組が中心となって行われ、主な祭礼の準備は前日の土曜日に行われる。神主組は祭りの準備に備えて、早朝から水垢離をして身を清める。その後、神社に集まり、神を立て神輿の飾りつけがおこなわれる。神迎えの行事は、この日の宵宮祭りに行われるが、神迎えが済むと神主は神殿に籠るのが慣わしである。

日曜日の本祭りでは、神輿が集落を一巡する神輿渡御が行なわれる。まず宮司が西の四足門を入ったところにある神輿堂に安置されている3基の神輿をお祓いし、神主組及び当番組、見物人を祓い清める。お祓いが済むと、3人の神主がそれぞれの神輿の前に座り、神輿を取りにくるのを待つ。「デヤッシャイマショー」という掛け声で、神輿の舁き子が一斉に飛び出し、神輿を我先にと担ぎ出す。



【神輿をかつぎ出す】

神輿の渡御は、最初に御正体、幣走へばしりと呼ばれる御幣、神主、神職、神輿の順に進んでいく。最初に神輿を出したものは、「東の四足門」のところまで舁いていく決まりである。残り2基の神輿は、菅浦のほぼ中央に位置する菅浦家の前で、神輿が3基揃う

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

のを待つことになる。

集落の東端にある東の四足門に神輿が到着すると、四足門の前では祝詞があげられる。その後、神輿は引き返してきて、代官屋敷であった菅浦家住宅の前で待つ2基と合流する。神輿が3基揃ったところで祝詞があげられ、お神酒とちまきが集落の人々に振舞われる。

集落を一巡し、神輿の渡御が終わると、3基の神輿は神輿堂に据え付けられる。この

あと神輿に所定の神饌が上げられ、幣祭りが行われる。各社の神主3人が定められた作法に則って、「天下太平」「五穀成就」「万民豊楽」と3回ずつ計9回唱えつつ、幣が地をなでるように回す。その後、幣を倒す幣倒しといわれる神事が行われたあと、神輿を担いで参道を登り、神霊を本殿にお返しし、神輿を神輿蔵へ返して本祭は終わる。

神輿が巡る集落内では、琵琶湖からの波風除けに設けられた石垣が多く見られる。

明治29年(1896)に作成された「保良神社之景」からは、当時の集落の姿をうかがい知ることができる。湖岸沿いの石垣や西の四足門が見られ、さらに当時は北の四足門があったこともわかる。近年はかつぎ手の不足から神輿は一基のみが渡御するようになった。



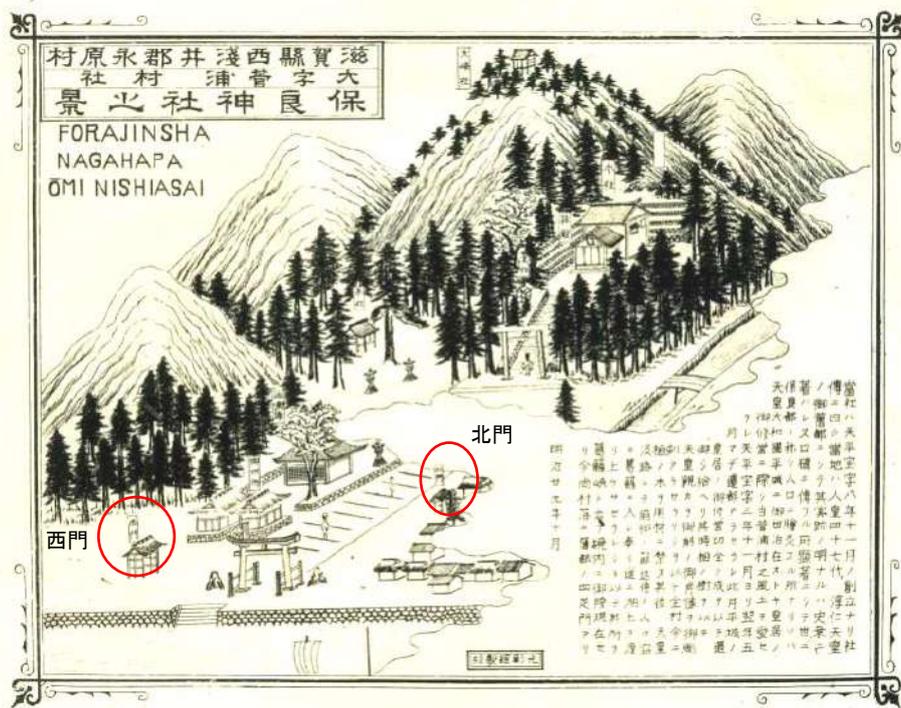
【東の四足門の前で祝詞をあげる】



【神輿渡御】



【幣祭り】



【保良神社之景（明治29年）】（須賀神社蔵）

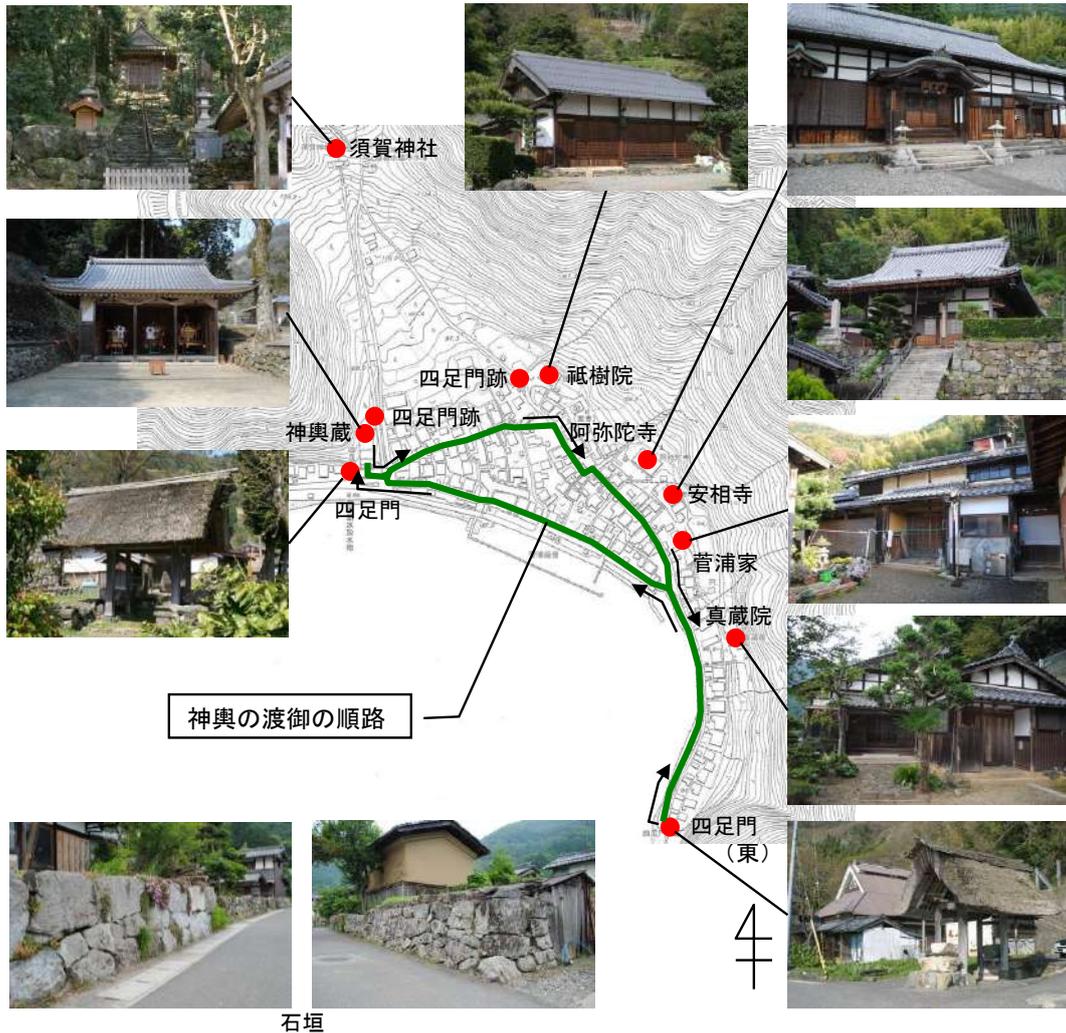


図 【須賀神社春季例祭における神輿渡御の順路】

2) 奥琵琶湖に暮らす人々の営み

琵琶湖と人々のかかわりは、古くは1万年前にあたる縄文時代から確認でき、それ以来、人々は琵琶湖とともに生活してきた。中世には供御人として漁を行ってきた菅浦の人々をはじめ、琵琶湖岸の集落では、水田を営みながら漁を行うという、半農半漁を基本とした生活様式が弥生時代から根付き、現在でも、企業で働かたわら漁を行う人もおり、獲った魚はその日の食卓にあがっている。



【昭和30年代のオイサデ漁(菅浦古写真集)】

奥琵琶湖一帯における代表的な漁法としてオイサデ漁があり、明治以降大正にかけて普及していったとされる。オイサデ漁は、コアユが鳥を恐れる習性を利用した漁法であり、竿の先に鳥の羽根をつけ、羽根が湖面を滑るように走らせ、コアユが驚いて一方向に進むところを待ち構えて網ですくい取るものである。早い年で2月末、通常は3～6月に行われる。この漁は、岸辺で行うため、岸辺がある程度開けている必要があり、奥琵琶湖一帯の湖岸線ではこのような場所が多いため、盛んに行われている。

このほかにもエリ漁など様々な漁法を活用して現在も漁が行われており、平成30年(2018)3月時点で、奥琵琶湖を漁場としている西浅井漁業協同組合では、正規組合員28人、準組合員32人、朝日漁業協同組合では、正規組合員26人、準組合員61人が活動している。



【現在のオイサデ漁】
(左:竿の先につけた鳥の羽根でコアユを追い込み、中央:広げた網ですくい取る)



【菅浦の湖岸線】

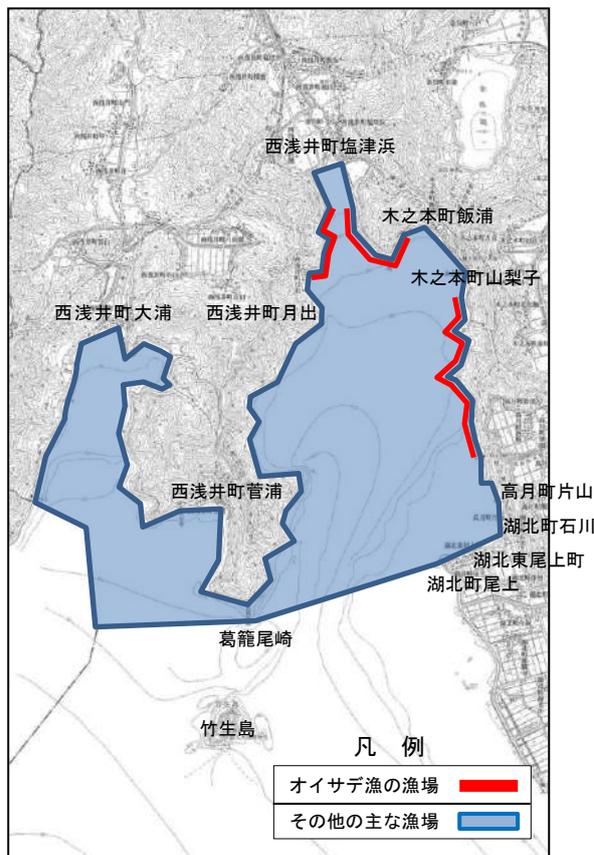


図 奥琵琶湖におけるオイサデ漁の漁場とその他の主な漁場

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

また菅浦集落と同様に奥琵琶湖一帯の集落では、琵琶湖岸沿いや集落内の生活道路などに、1～3m程度の石垣が設けられているところがある。湖北東尾上町ひがしおのえにおいても、明治9年(1876)に作成された『浅井郡第十区東尾上村地位等級取調絵図』に石垣が描かれており、その一部が現存している。



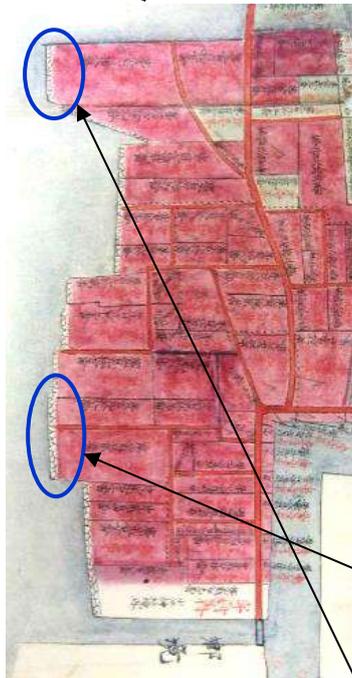
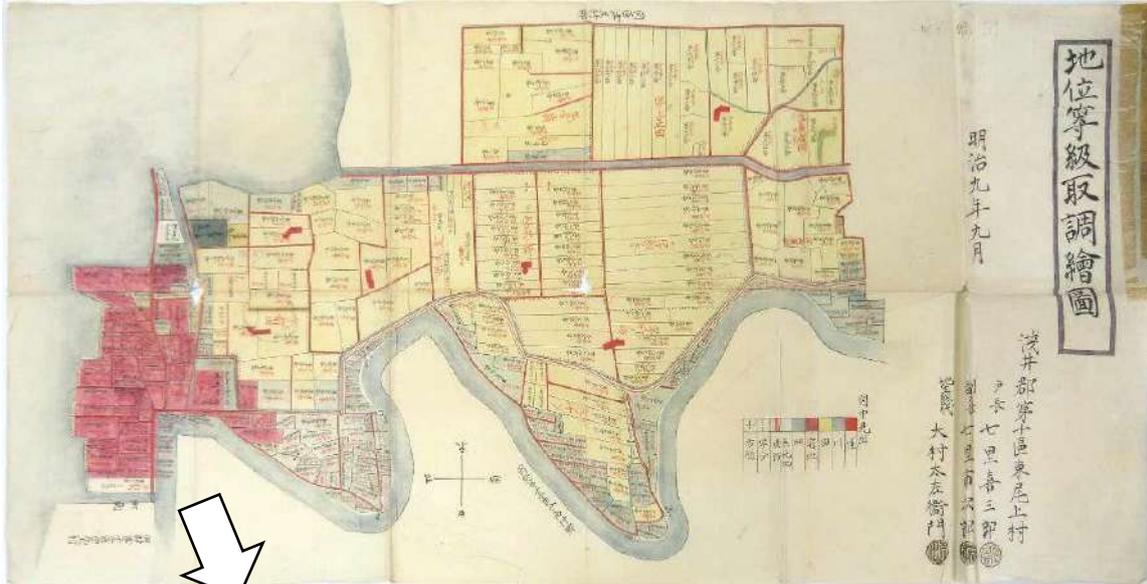
【湖岸沿いで干される漁具】

これらの石垣は、古くは琵琶湖の波によって家屋や道路が被害を受けたため、波風除けとして家屋の周囲に設けられたものである。湖岸沿いの石垣は、かつてそこが汀線であったことを示しており、家屋の前には、水が入ってくるのを防ぐため、堰板せきいたをはめ込んでいた設備が残っているところもある。特に菅浦集落では、湖岸の石垣と同様に、集落内を山側から流れる深い水路にも石を積み、水路に「イド」と呼ばれる水溜を設け、現在も生活用水として利用している。また、土地も限られていることから、石垣によってできた平坦な土地も畑として利用するとともに、オイサデ漁など漁業で使われる網などの漁具を干す光景も見られる。

このように、菅浦は奥琵琶湖の急峻な地形きゅうしゅんに囲まれた独特の景観で、湖上交通の重要な湊として栄え、中世にまでさかのぼる集落運営のしくみとともに維持されてきた水辺の暮らしが今も息づいており、「菅浦の湖岸集落景観」として、平成26年(2014)10月6日、国の重要文化的景観に選定された。

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

【浅井郡第十区東尾上村地位等級取調絵図（明治9年）】（東尾上自治会蔵）

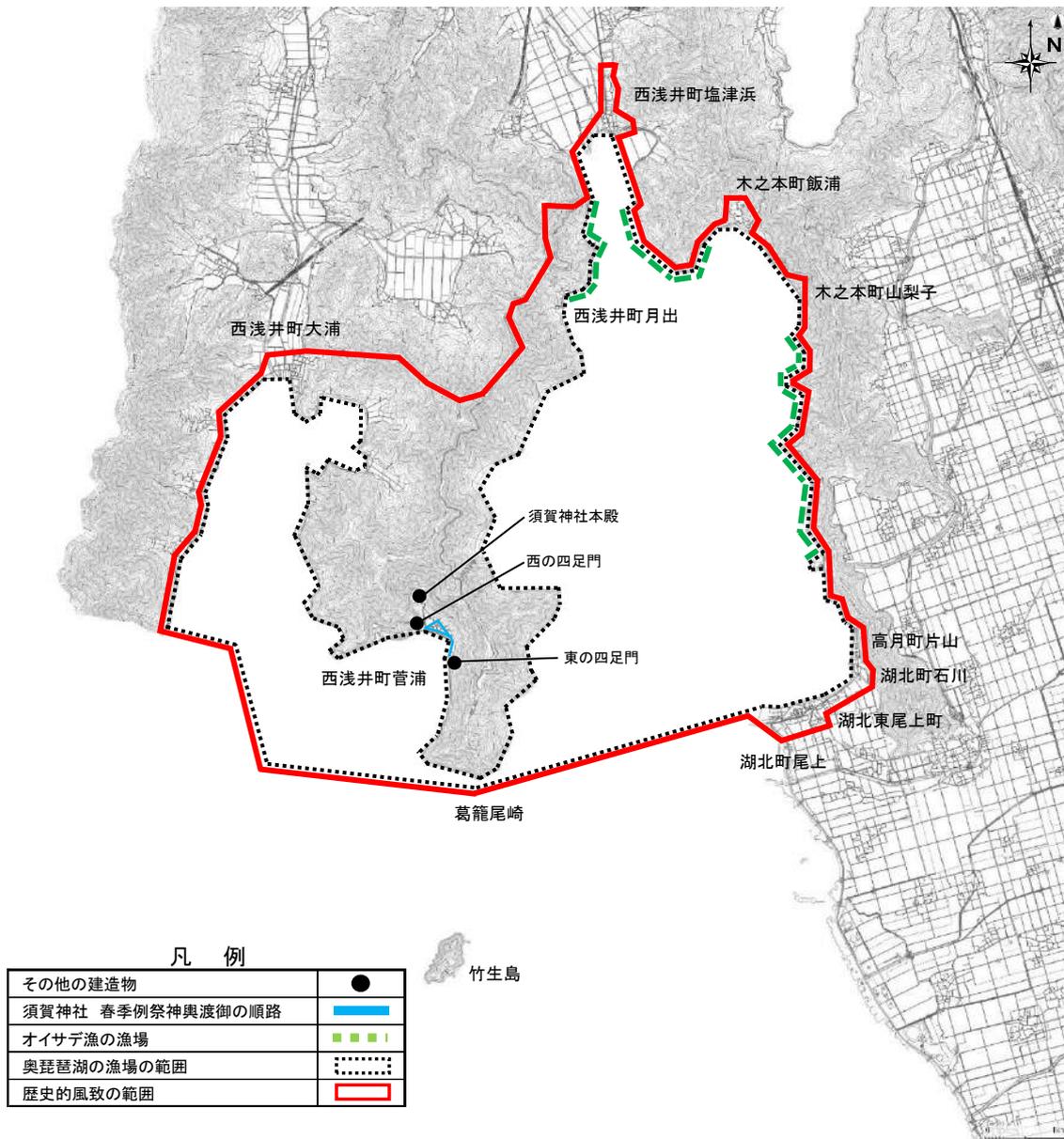


【湖北東尾上町集落内に残る石垣】

まとめ

奥琵琶湖一帯の集落では、古来より琵琶湖で漁を営み、またその水運を利用した湖上交通や湖上輸送を盛んに行うなど琵琶湖とともに暮らしており、今も残る石垣がその歴史を物語っている。なかでも菅浦は、険しい山々と琵琶湖に囲まれた環境のなかで、住民全員で自治を支える体制を確立させた。静寂が漂う集落のなかで、四足門が存在感を示すなど、惣村の名残が人々の暮らしのなかに今も静かに息づいており、奥琵琶湖にみる歴史的風致が形成されている。

図 奥琵琶湖にみる歴史的風致の範囲



8 地域の民俗行事にみる歴史的風致

はじめに

本市域を含めた湖北地方は、民俗芸能・民俗行事の宝庫である。それらは古来地域の
人びとの暮らしと深くかかわりながら展開してきた。

オコナイや春秋の祭礼、村々における野
神信仰や地蔵信仰（地蔵盆）など、地域住
民の信仰を表わすものとして重要であり、
地域住民の生活と一体化している。

豊かな実りと日々の暮らしの平穏を神に
祈る祭祀は、古代から現在に至るまで、自
然を崇拜し、畏敬する心と深く結びつきな
がら、伝承されてきた。湖北においても、
自然の恵みに感謝し、豊穰を祈願するオコ
ナイをはじめ、神輿や虫送りなど、さまざま



【地域で信仰される野神（高月町西物部）】

な祭礼が、氏神を中心に、地域住民の最大行事として繰り広げられている。また、地蔵
信仰（地蔵盆）は、各町内に安置されている地蔵菩薩に灯明をつけ、供え物をあげて祀
る子ども中心の行事である。近畿地方を中心に広く行われており、市内には特に高密度
に地蔵堂が分布し、古くから人々に親しまれている。このほか野神信仰は、ケヤキやス
ギなど巨大な古木を神として祀る自然信仰で、旧伊香郡地域で広くみられる。また湖北
地方には、水神信仰や雨乞い習俗にかかわりをもつ太鼓踊りが数多く伝承されおり、湖
北に生きる人々が伝統文化の担い手として神を祀ってきた一端にふれることができる。

8-（1） オコナイにみる歴史的風致

① はじめに

滋賀県湖北地方の民俗行事のなかで、最も特徴的なものはオコナイである。オコナイ
は、村内の豊作と安全を祈願し、1月から3月にかけて繰り広げられる年頭行事である。
同様の行事は西日本で広範囲に執り行われているが、これほど高密度にオコナイ行事が
村々で営まれている地域は、滋賀県、とりわけ湖北地方をおいてほかにない。

オコナイという言葉の初見は平安時代に遡る。『今昔物語』の巻第十九「以仏物餅造酒
見蛇語第二」に、村々のオコナイの様子が記されている。「比叡山で修行した僧が、生
まれ故郷の摂津の国に帰り、妻を娶って仏事を執り行っていた。僧はいろいろな法要に
呼ばれていたが、特に正月のはじめの修正会には必ず導師になって行い（オコナイ）の
餅を多く貰っていた」とある。このことから当時、全国的に村内安全、五穀豊穰を願う
修正会が寺院で執行されていたことがわかる。湖北地方の寺院も例外ではなく、廃寺後
も人々の手により年頭のオコナイ行事として連綿と伝承されてきたと思われる村が数多
くある。

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

行事のあらまは、「御鏡餅」（御鏡ともいう）をつきあげて整え、行列して参詣し神仏に供えたのち下げて、直会をし、トウヤ（当屋、頭屋）と呼ばれる村の代表者が、オコナイの祭祀権を次のトウヤへ渡す（トウ渡し）というものである。時代の変遷とともに簡略化されながらも、例祭は今も粛々と執り行われている。ところがこれに付随する要素は村ごとに実に多彩である。御鏡といっても一俵を越す巨大なもの、四角いものなどさまざまあり、つくりものに至っては、樺や柳の枝に餅を巻いたマユダマ、竹串に小餅を刺して菖蒲で飾った花、エビと呼ばれる大きな注連縄など、同じものは一つもない。



【マユダマを先頭に社参する行列（高月町東阿閉）】



【御神体と御鏡餅をお供えする様子（高月町柳野中）】

② 建造物

1) 川道神社 本殿

川道町にある川道神社は、社伝によると和銅年間（708～715）に河内忌守が近江守となり、当地に赴任し社殿を造営したのが始まりと伝える。もとは神明社と八王子社の二社があったが、明治3年（1873）に合祀して川道神社と改称した。川道神社記録文書によると、明治41年（1908）勅令に基づき県知事から神饌料を寄進される神饌幣帛料供進社に指定されたのを機に本殿を改築した。



川道神社 本殿
三間社流造、檜皮葺
明治41年（1908）建築（文書）

「川道のオコナイが済まなければ春が来ない」と言われる川道神社のオコナイは、数多い湖北のオコナイのなかでも冠絶した地位を保っていた。一俵の御鏡餅をそれぞれ7つの庄司（村の中の1単位）で精進潔斎しながらち上げ、川道神社に供えるという規模内容ともに自他ともに認める特別の存在であった。

2) 杉野中薬師堂

木之本町杉野の集落内にある薬師堂で、滋賀県指定有形文化財指定資料によると建築様式から16世紀後期に建築されたとみられる。長方形の建物の奥行きを指す「桁行」に6本の柱が立ち、柱と柱の間が5つあるため、桁行5間、間口幅を指す「梁間」に4本の柱が立ち、間が3つあるため、梁間3間の形式となる。屋根は切妻造りの妻入で、奥行きが長く、装飾性を排した素朴な仏堂である。内陣には、入母屋造妻入の一間厨子を安置している。



杉野中薬師堂
一重、切妻造、棧瓦葺
室町後期建築（建築様式）

堂内は内陣を狭く、外陣に広い空間を設け、寄合や行事が行えるようになっており、滋賀県の地域性を帯びた建築物であるとともに、オコナイの場にもなっていることから価値が高いことから、平成20年（2008）7月23日、滋賀県指定有形文化財に指定されている。

3) 走落神社 本殿

高月町馬上にある走落神社は、社伝によると神亀年間（724～729）の創祀と伝わる延喜式内社である。仁和年間（885～889）のころ、この地で名馬が産まれたので、宇多天皇に献上し「馬上」の2文字の宸筆の額を賜った。その後祠堂を建立し、鳥居に「馬上」の額を掲げ、この鳥居を通過する際は、必ず下馬し拝礼したという。しかし、天明7年（1787）に起こった大火で、この扁額や社蔵文書を焼失した。



走落神社 本殿
春日造、銅版葺
大正15年（1926）建築（文書）

本殿は、明治29年（1896）の台風に伴う山崩れで崩壊したため、大正15年（1926）に再興した記録（神社本殿新築委員会）が残っている。なお、境内には意富布良神社と地蔵堂（極楽寺）が本殿とは別に祀られており、オコナイでは御鏡を背負った3人の「鏡負い」が、それぞれのお堂に向かい神仏に御鏡を奉納する。

③ 活動

1) 川道神社のおコナイ

姉川沿いの農村部に位置する川道町のオコナイは、湖北最大のオコナイであり、古式を重んじた厳格なしきたりを今に伝えており、樋口亮一『伝説と歴史 湖国夜話』(1935)や井上頼寿『近江祭礼風土記』(1943)などに川道神社のおコナイの行事が記載されており、古くから数多くの研究者により調査研究されてきた。



【川道神社】

川道町は約300戸の世帯で構成され、川道神社のおコナイには30~50戸で構成される7組の「村」が参加し、藁仕事から道具を片付けるまでの約1週間のあいだに、さまざまな準備と儀式を繰り返す。中心的な役割を担う当屋は2軒1組あたり、一方は御鏡つき、宵宮、本膳などを行い、他方はこれを補助する。

川道町では、男子は16歳になると「村入り」し、それと同時に父親は村から引退する。川道神社のおコナイは村入りしている男子のうち、16歳から35歳までの若衆が仕事にあたり、年長者が年番のまとめ役として若衆を束ね、指示を出す。この御鏡つきや宵宮は村によって異なるが、一連の流れはほぼ同じである。若衆は今年の役割を確認すると無言のうちに手際よく段取りにかかる。

御鏡つきは一俵の糯米を用い、手間を要する独特の御鏡つきによりつくられる。できあがった御鏡は表面はろくろをかけたかのように、うっすら丸みを帯び、格別の存在感がある。

前夜祭にあたる宵宮では、御鏡を載せる神輿の準備が行われ、夜9時になると神社に供える献鏡の儀式が厳かに始まる。提灯や御幣で飾りつけた神輿のなかに、注連縄をつけ紐でくくった鏡餅が納められる。若衆は清めの酒を含み、カンバンというオコナイの半纏に着替え、裸足に通常の半分の草鞋をはき、豊作を祈願した「エーモト、ホーホーヨー、ソーラエ」の掛け声とともに、吹雪のなかでも神輿をかついで川道神社に向かう。



【御鏡つき】



【宵宮での献鏡の儀】

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

翌朝 10 時には本膳が始まり、紋付き袴の人々が集まり神事が執り行われたあと、年寄り衆が中心となって直会なほらいが始まる。川道は古くから稲作とともに養蚕が盛んであり、今も蔵のある立派な家並みが残っている。年寄り衆が中心となり、屏風を設えた座敷のなかで当屋の宴が催される。

夕方には、若衆が三々五々、御鏡を下げにやってくる。太鼓をたたき、歌いながら、決められた道を通して当屋宅へ向かい、各村々へと戻され、人数で均等に分けそれぞれが自宅へと持ち帰り、ありがたくいただくのである。

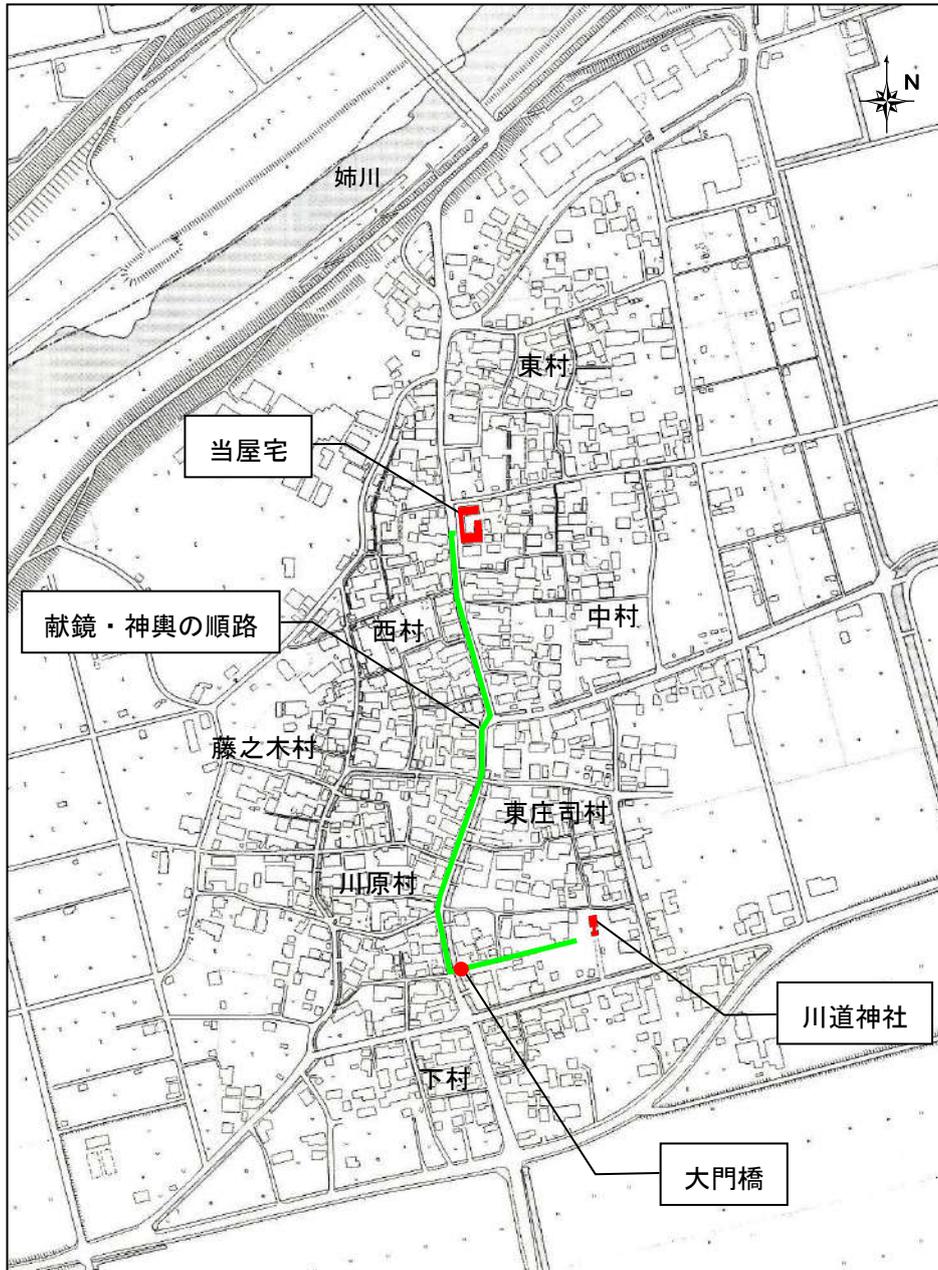
川道では、この伝統あるオコナイをどうすればつないでいくことができるのか、村の 18 歳以上の個人全てを対象にアンケート調査を行った。その結果を受けて、2023 年から行事内容を一新した。鏡餅は組ごとに作るのではなく 1 個を業者に発注する、女性の参加、頭屋での行事はすべて町内のコミュニティセンターで行う、開催日は 2 月の最終日曜の 1 日だけとする、毎年一つずつ課題を見つけ、改善していくとした。今後、他地域のオコナイ行事も、価値観の多様化や人口減少による担い手の不足など種々の要因から変化していく可能性が高い。



【川道神社に供えられた 7 つの御鏡】

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

図 川道町におけるオコナイ（平成20年、西村の献鏡・神輿の順路）



2) 杉野中薬師堂のオコナイ

木之本町杉野にある中組で行われるオコナイは杉野中薬師堂で行われ、「杉野中村文書」によると、享保8年（1723）の記録が残っており、少なくとも江戸時代中期から行われていたと考えられる。堂内は内陣を狭く、外陣に広い空間を設け、^{よりあい}寄合や行事が行えるようになっており、滋賀県の地域性を帯びた建築物であるとともに、オコナイの場にもなっている。



【杉野中薬師堂】

オコナイでは、午前3時ごろに関係者が太鼓や^{かね}鉦を鳴らしながら集落を巡って住民を起こす「起こし太鼓」を合図に宮参りが始まる。地元の集会所に集まった男衆は、背に塩を塗る「行水」で身を清めたあと、2組に分かれて集会所を出発する。^{たいまつ}松明を手に近くの新野中薬師堂まで練り歩く。2組が合流する場所では、男衆は「^{じんぎあい}神儀合」という儀式で歌舞伎のように見得を切り、奉納する花や御鏡餅をぶつけ合うのである。



【神儀合で花をぶつけ合う様子】

続いて、雪が積もった参道を駆け上がり、薬師堂の中に入る。堂内では、松明を手に「薬師の前で燃えた燃えた、燃えでっぼうのはんじきじゃ」など掛け声をかけながら、堂内を駆け回って五穀豊穡や集落の安全を願うのである。

3) 走落神社のオコナイ

高月町馬^ま上で行われる走落神社のオコナイは、起源は明らかではないが、明治39年（1906）起帳の『神事塔家當籤簿』が残されており、明治34年（1901）のオコナイの内容が記載されている。馬上のオコナイは、勇^{かがみ}壮な「鏡負い」が集落内を練り歩くことに特徴がある。3人の鏡負いは、顔を白く塗り、太いひげを描き、^{こも}菰で巻いた御鏡を太い縄で背負った姿で「五穀豊穡、家内安全」などと声をかけながら、集落の人々に負い縄をかけて回る。その後、神社に到着した鏡負いは、境内で走落神社本殿、意^{おほ}富布良神社、地蔵堂（極楽寺）に分かれ、それぞれのお堂に向かい神仏に御鏡を奉納していたが、近年、鏡負い行事は廃止となった。



【勇壮な姿の鏡負い】

④ まとめ

昔から「オコナイがすまなければ湖北に春が来ない」と言われており、古式を今に伝える大切な春の神事・オコナイは、地域の人々によって長く守り伝えられた“生”への営みの結晶であり、今なお、厳しい冬を乗り越え、芽吹き^{めづき}の春へと向かう村々の風景と一体と

なって伝わっており、オコナイにみる歴史的風致が形成されている。

8-(2) 地蔵盆にみる歴史的風致

① はじめに

長浜市の民俗行事のなかで、全市的に行われているものに夏の地蔵盆がある。地蔵盆は、地蔵菩薩の縁日である8月23日、24日を中心に、各町内に安置されている主に石造地蔵菩薩に灯明をつけ、供え物をあげて祀る子ども中心の行事である。近畿地方を中心に広く行われているが、長浜市内には特に高密度に地蔵堂が分布し、古くから人々に親しまれてきた。

地蔵尊は、六道の衆生の救済、特に地獄におちた人々の救済の仏として、平安時代末期から京都を中心に信仰され、次第に各地へ広がり、長浜にも伝わったと考えられている。地蔵尊は村へ入ってくる悪霊を取り除く道祖神信仰と結びつき、村の入口や路傍、辻などに祀られることが多い。その多くには地蔵堂が設けられ、なかには基壇まで設けられているものもあり、いかに地域の人々に大切にされてきたかをうかがうことができる。地蔵尊は子どもの成長を守る仏として庶民の信仰の対象となり、その地蔵信仰と亡くなった人々を追善供養する盆行事が習合して地蔵盆が成立したと考えられている。

図 市内中心部における地蔵堂の分布状況（平成13年長浜市調査）



② 建造物

1) 田の中延命地蔵尊 地蔵堂

長濱八幡宮の南に位置する田の中延命地蔵尊は、今から約150年前の江戸時代後期から「八幡の地蔵さん」として人々の信仰を集めてきた。棟札から明治11年(1878)に建てられたことがわかる現在の地蔵堂には、水田から掘り出されたという地蔵尊が祀られている。地蔵堂内部には、紅提灯や古い絵馬、奉納額が飾られ、四代目となる堂主により、いつも綺麗な花や水、線香が供えられている。また、内部には銅製の古いおみくじ筒が残されており、その側面には「奉納木村氏・安政四己年二月吉日」(1857年)と刻まれ、古くから人々に信仰されていたことがわかる。



田の中延命地蔵尊 地蔵堂
入母屋造、棧瓦葺
明治11年(1878)建築(棟札)

2) 西野薬師観音堂 地蔵堂

地蔵堂は、西野集落の中央に位置する西野薬師観音堂の境内にある。江戸時代、集落の西側にある「相談橋」と呼ばれる場所にあった石橋の裏側から地蔵尊を彫刻した掛け石が見つかったため、現在地に移された。地蔵堂は棟札から明治29年(1896)に建てられ、堂内に地蔵尊を安置されたことがわかる。境内にはこのほかにも地蔵堂があり、地蔵盆には、町内会ごとに地蔵堂の飾りつけを行い、子どもだけでなく、老若男女が薬師観音堂の境内に集まり、夏の夜を楽しく過ごすことが地蔵堂の建築以降、続けられている。このように地蔵盆の日に多世代の住民が集うことで、地域社会の重要なコミュニケーションの場にもなっている。



西野薬師観音堂 地蔵堂
切妻造、棧瓦葺
明治29年(1896)建築(棟札)

③ 活動

地蔵盆

長濱八幡宮の南に位置する田の中延命地蔵尊をはじめ、各町で行われる地蔵盆は、子どもたちが主役であり、自分たちで計画を立てて実行し、これを地域の大人たちが見守る。まず、地蔵や地蔵堂をきれいに洗い清め、新しい前掛けを着せ、地蔵堂の周囲は提灯や行灯で飾り付けを行い、さらに各戸を回ってお賽銭やお供え物を集める。地蔵は子どもたち自身による読経で供養されたあと、お供え物のスイカや菓子類が振る舞われ、夜になると肝試しや花火を楽しむ。西野薬師観音堂の地蔵盆は、地蔵堂が建てられた明治29年(1896)以降、町内会ごとに地蔵堂の飾り付けを行い、子どもだけでなく、老若男女が薬師観音堂の境内に集まり、夏の夜を楽しく過ごすことが続けられている。



【地蔵盆の様子】

このように、子どもたち自身の手で運営される地蔵盆は、子どもたちが集団生活に必要な社会性や協調性、リーダーシップ、生気に満ちた創造性を自然な形で身につけることができる貴重な機会になっている。このような光景は、湖北町山本や高月町西野など市内各地で見られ、年1回の縁日に多世代の住民が集うことで、地域社会の重要なコミュニケーションの場にもなっている。



【地蔵盆で飾り付けされた町並み】



【集落の入り口にある地蔵堂（湖北町山本）】

④ まとめ

地蔵盆が行われるころには、うるさかった蟬せみの声がいつの間にか消えつつあり、空には秋の気配が漂いはじめる。ほほえみを浮かべる路傍の石仏地蔵尊は、子どもたちに楽しい夏の思い出を与えると同時に、夏の終わりが近づいたという一抹の淋しさを感じさせ、地蔵盆にみる歴史的風致が形成されている。

8-(3) 野神信仰にみる歴史的風致

① はじめに

野神は、滋賀県をはじめ、奈良県や大阪府など、近畿地方に多く分布する稲作の守護神の一つであり、五穀豊穡を祈願する神として祀られている。滋賀県内では稲作だけでなく畑作物を含めた農作物の神様と考えられており、県内の野神の風習は湖南・湖東・湖北地方に残っている。特に湖北地方の高月地域や木之本地域では、大きな行事の一つとして脈々と受け継がれており、その依り代は、ケヤキやスギなどの巨木や老木であることが多く、「野神さん」と呼ばれ、これまで人々に大切にされ、何百年という歴史を刻んできた。江戸中期の集落の記録に、「野神」についての記録が見られることから、それ以前から信仰されていたことが分かる。



【高月町柏原の大ケヤキ】



【木之本町黒田のアカガシ】

野神がある位置は、集落の入口や他集落との郷境、歴史的意義のある場所、用水の分岐点など、村にとって重要な場所であることが多く、高月町高月の野神塚は百余年前、前田俊蔵が早ぼつから村を救おうとこの場所で自刃した場所であり、高月町唐川のスギは、昔からこの地域が水害に悩まされていたことから、それを治めるために観音像を沈め、その目印として植えられたとされる。

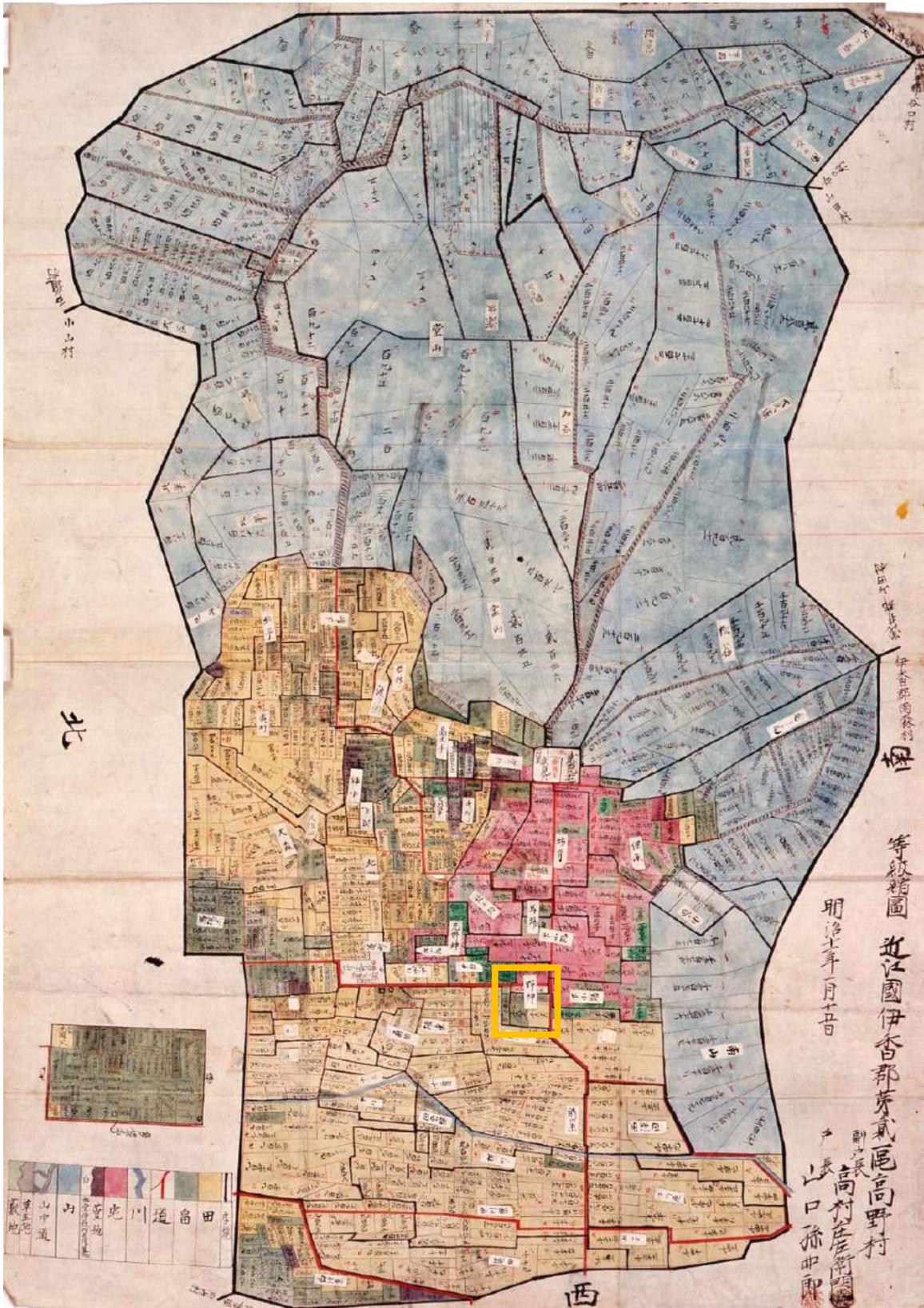
渡辺大記『野神に見る、人間と自然との共生の形態』(2007)によると、高月地域の野神の依り代の種類としては、樹木が16集落、塚が6集落、石碑が4集落、祠が1集落、自然石が1集落であった。樹木では、スギが最も多く9集落、次いでケヤキが5集落、サクラとサカキが各1集落であった。



図 高月地域の野神とその分布（野神に見る、人間と自然との共生の形態 平成19年）

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

高月町高野における野神の位置（集落の入り口）



【近江国伊香郡第二区高野村等級縮図（明治11年）】高月観音の里歴史民俗資料館蔵

② 建造物

1) 野大神 石柱（高月町高野）

高月町高野の集落の入り口に位置し、大スギを野神として地域住民から崇敬されており、その横には「野大神」と記した石柱が建っている。石柱は裏書から昭和4年（1929）4月14日に建立されたことがわかる。

毎年8月17日に最も近い日曜日に五穀豊穡を祈る「野神祭」が行われる。野神前を発着点に、御幣、太鼓、鉦、松明の順で隊列を組み、太鼓と鉦を演奏しながら集落の境界沿いを巡る。



野大神 石柱（高月町高野）
昭和4年（1929）建立（裏書）

2) 野神塚 石柱（高月町高月）

高月町高月の東側にある野神塚は、隣集落との郷堺に位置している。小高い丘状に隆起しており、その横には「野神塚」と記した石柱が建っている。石柱は裏書から昭和13年（1938）秋に建立されたことがわかる。

毎年8月16日に五穀豊穡を祈る「野神祭」が行われる。また、明治16年（1883）の大干ばつの際、同集落の前田俊蔵が美濃国池田郡川上村山中の夜叉が池へ雨乞いに向かった。その後、当地に大雨が降り、祈願が成就したため、同年8月23日にこの地で自刃した記録が残っている。



野神塚 石柱（高月町高月）
昭和13年（1938）建立（裏書）

③ 活動

野神祭

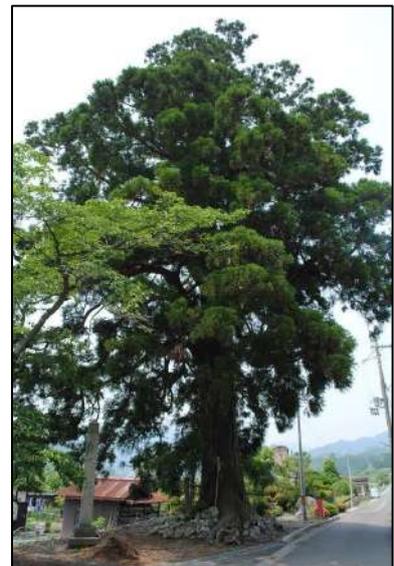
野神がある集落では祭事として野神祭を行うところが多く、湖北地方では毎年8月前後に行われる。この時期は、稲の出穂期にあたり、農家にとっては用水期であり、病虫害や風水害の被害が懸念される時期でもある。このため、稲の害虫を追い払う火祭りである虫送りや、雨乞いやその返礼のためと思われる太鼓踊り、相撲などを行うなど、野神祭の内容は集落によって様々である。



【余呉町下余呉の太鼓踊り】

また、太鼓踊りは野神祭に限らず湖北地方の多くの地で行われており、その由来としては雨乞いとそのお礼、お盆の精霊迎えや豊年祈願、山神迎えを目的としているものが多い。

高月町高野の野神は、集落を入ったところにある大スギを野神としている。明治11年(1878)の『伊香郡第二区高野村等級絵図』には「野神」の文字が見られ、現在もこの場所に野神が立っており、その横には昭和4年(1929)に建てられた石碑がある。



【高野集落の野神】

毎年8月17日に最も近い日曜日に「野神祭」が行われており、享和元年(1801)の高野自治会の「申年小入用帳」には、「拾壺 野神祭礼入用 神酒御膳等」とあり、この当時から野神祭が行なわれていたことがわかる。自治会では、集落を東西南北の4つの組に分け、「普請」と呼ばれる様々な作業や行事の準備などを分担して行っており、野神祭も同様にして行われる。各組では「年行事」と称される当番者が決められており、野神祭の運営に当たった組では、年行事が「祭主」として準備にあたる。

祭には原則として、組を構成する各戸から1人が出ることになっている。

野神祭当日の朝、担当の組が高野神社拝殿に集まり、礼拝を済ませたあと、隊列を組んで野神へと向かう。列順は御幣、一番太鼓、二番太鼓、三番太鼓、鉦(2つ)、松明の順である。このとき、太鼓と鉦を演奏しながら歩いていくが、その拍子は3種類あり、それぞれ少しずつ異なっている。高野神社に対して遠ざかる方向に進むときには「下り拍子」、逆に神社に近づいていくときには「上り拍子」、神社に対して横方向に進むときには「横拍子」で演奏される。演奏の変わり目には、「そーりゃーのう」の掛け声で、太鼓と鉦の調子を合わせる。またこのときの太鼓と鉦の拍子は、オコナイの供進のときと同じである。

野神に到着後、そこでスギの葉を集め、それを焚きつけにして松明に点火する。この

第2章 長浜市の維持向上すべき歴史的風致

とき松明の柴を半分だけ燃やす。その後、野神を出発して集落の境界沿いを巡る。西に下り集落を過ぎ、北方に向かう西端の筋で曲がり、農道を北に進む。境近くで松明を燃やしきり、東方向に向かう最北の筋を曲がり、東に進路を変える。山裾に到ると、山沿いに南へ、そして集落の北側の道を西に下り野神の祭場に戻る。野神の祭場では、前年から供えられていた御幣を取り外し、新しい御幣を野神のスギの木の幹にくくりつける。

このように松明を持ちながら集落の境界を歩く姿に、「虫送り」や「郷廻り」の同様の要素が見られる。

このほかに8月16日には、高月町高月では、集落東隣との郷塚に位置する野神塚で、野神祭が斎行されている。このように各集落で「野神祭」は斎行されており、秋の実りに向け、野神に五穀豊穡を祈願する姿が見られる。



【郷廻りの様子】



【野神前で松明を燃やす】

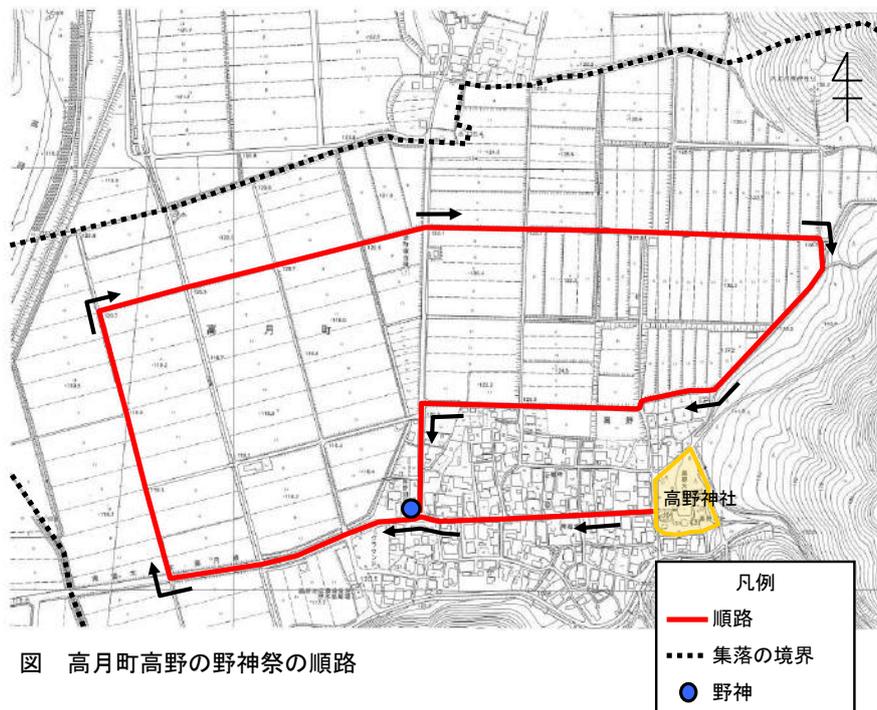


図 高月町高野の野神祭の順路

④ まとめ

集落内にある一際目を引く巨木には野の神が宿るとされる。秋の実りに向けて人々は野の神に五穀豊穡を祈願し、さらには集落の繁栄を望む。その姿からは、今も変わらず人々が持ち続けている自然への畏敬の念が感じられ、野神信仰にみる歴史的風致が形成されている。

地域の民俗行事にみる歴史的風致のまとめ

本市域を含めた湖北地方では、豊かな実りと日々のくらしの平穏を神に祈る祭祀が、古代から現在に至るまで、自然を崇拜する心と深く結びつきながら、伝承されてきた。自然の恵みに感謝し、豊穰を祈願するというオコナイをはじめ、さまざまな祭礼が、地縁で結ばれた氏神を中心に、地域住民の最大行事として繰り広げられている。また、子どもが中心となって行われる地藏信仰(地藏盆)やケヤキやスギなど巨木を神として祀る野神信仰、稲の害虫を追い払う火祭りである虫送りや雨乞いやその返礼のための太鼓踊りなど、地域住民が一体となって無病息災や五穀豊穰を祈る姿が今も見られ、地域の民俗行事にみる歴史的風致が形成されている。

図 地域の民俗行事にみる歴史的風致の範囲

